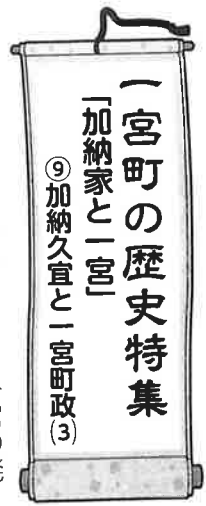


平成30年12月号



加納久宜は観光地としての一宮の発展を画策しています、それは名士の別荘の誘致にとどまらず、町の開発にまで及び、海岸に高級旅館を建設することを推進しました。

平成27年(2015)に発見された「旧斎藤家文書」から、その構想を見てみましょう。

写真は明治40年(1907)11月付の久宜直筆の書簡で、宛先は現在の一宮学園の敷地に別荘を有していた三井家の三井八郎次郎です。

この文面の中で、久宜は一宮町には書生宿のような宿しかなく、紳士が泊まれるような旅館はない、そういう人々が泊まれる居心地のいい旅館を作らなくてはならない、と述べています。ちよつと寂しい感じもしますが、藩主・華族としての家柄を持つ久宜の視点として大変興味深いものです。

そして、この書簡の中で注目すべきは、久宜が旅館建設のために三井にお金を貸してほしいと、50000円(現在の貨幣価値で約16000万円)もの出資を依頼していることです。一宮に

別荘をもった名士と一宮の関係を示す貴重な記述です。

高級旅館の建設予定地は海岸の松林、久宜邸(一宮館の隣接地)の隣とされています。残念ながら、書簡によれば図面を添付する、とあるのですが、図面は残されていないため、どんな旅館を建てようとしたのかは不明です。

結局、この計画がどこまで実現したのかは資料が残されていないため、はっきりとしたことはわかりません。しかしながら、久宜が様々な視点から一宮の発展を目指していたことを物語る、貴重な資料であることには変わりはありません。



▲ 三井宛加納久宜書簡の末尾(「旧斎藤家文書」、中央付近に「加納久宜」、宛先の「三井尊台」がみえる。)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成31年1月号



一宮藩第2代藩主・加納久徴(1813~64)については広報2月号で紹介した通りですが、彼が一宮に「形」として残したものを少し紹介しましょう。

① 萌黄緘胸丸(町指定、玉前神社所蔵)

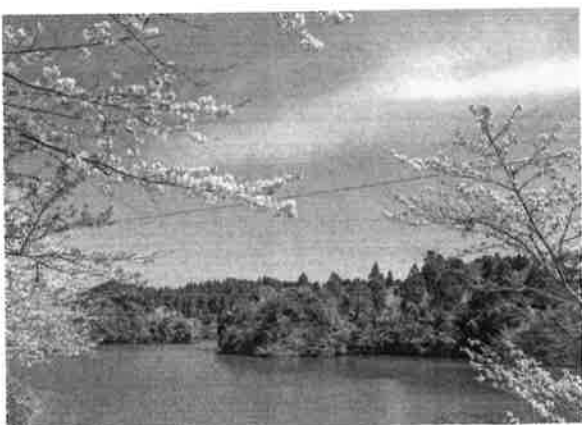
平安末期の武将・上総広常が源頼朝の武運長久を願って甲冑を玉前神社に奉納したという故事から、久徴が奉納した甲冑です。かつて戦乱で玉前神社が炎上した際に、広常が奉納した甲冑も失われたことを嘆いた久徴が奉納したといえます。

② 高藤山城古蹟の碑(町指定)

上総広常の居館伝承が残っていたこの城跡に石碑を建立したのも久徴です。おそらく、彼が石碑を建立しなければ、この伝承は忘れ去られていたことでしょう。

③ 洞庭湖(記念碑は町指定・市兵衛堀) 洞庭湖は灌漑用に久徴によって作られた貯水池で、天保15年(1844)に記念碑が建立されました。市兵衛堀は加納家臣の岩堀市兵衛に因んで名づけられた水路で、天保年間に洞庭湖から町内へ向かって作られました。

このように見ていくと、久徴は郷土の歴史に大変造詣があり、かつ領内の治世に尽力した人物といえます。彼の功績は今の私たちに「遺産」として残され、語り継がれているのです。



▲ 春の洞庭湖の風景(撮影:秘書広報課)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416